



柳田為正

J・W・S・プリングル著（小原秀雄訳）

「生物学と人間科学」（三共科学選書 三共出版）

一九七八年発行

緑蔭の読みものとして、ときにはちとハードな、手ごたえのある一冊も悪くはないだろう。そう思って、海外の碩学たちのくつわを並べて大いに論じている右の書を取り上げてみました。

この本の読み手には、二つの課題が重なり合っています。

す。一つはいうまでもなく書物の内容をなす本来の主題そのもので、これについては以下に紹介を試みます。いま一つの問題は、翻訳書と取りくむという例の難儀な問題です。この方についてまず一言したいと思います。翻訳の問題は、実は当の訳者自身がまず取り組まねばならぬ問題だったわけです。広く世界の思潮・論陣に接するためには、言語の障壁を乗り越えねばなりません。それがこの日本ではおたがいに相変わらざるの難関となっているのです。

翻訳というわざは、いわゆる「語学」力ないし欧文和訳力だけの勝負ではなく、この本の訳者も、れっきとした学

識者の身をもって、訳業の苦難を「あとがき」で告白されています。訳者がかりにそのようであれば、読み手は一層のこと難渋する道理です。しかもなおこの難関こそが、知的鎖国状態を逃れるための唯一の通路なのです。明治期は文字どおり翻訳の時代で、それだけに言語・学力ともに一級の人材がみずからこの業に当たりました。当節ではどうやら（いまのこの一冊は違いますが）大先生たちはいわゆる「監訳者」の座に据わり、実際の訳業は駆け出しの門下一同が分担下請けに当たるといふ例が多く、責任の所在や不分明、出来栄えも冴えぬというものがままあります。

従って読者の方も訳本ときけば始めから通読・熟読に堪えぬしろものと心得、一冊買って手もとに置くだけの安心感という効用しか期待しない向きもあるようです。書物が本来の役目を果たしていないことになりました。

そういうわけで文化伝達上の難関は、いまも依然として難関。その点衣料や装身具といったたぐいの有形文化は、いとやすやすと伝播してきます。学問の分野でも、実験諸科学の技術や情報などは、現場第一線の若手たちが身につけて、交流もジェット機なみの速やかさですが、表記の書物の主題のような多少とも奥行き深く問口も広いじつくりし

た思索を要求するような分野では、右の難関がこの国を世界地理上の位置以上に隔離してきている実状が感ぜられます。書店に並ぶ新刊書の背表紙のみいたざらに輝かしく、知識・思想上の実質的歩どまり率は、決して思わしくないのです。

さてそろそろ第一の方の本来の主題に進まねばなりません。言語障壁の問題に紙数をとられたのも、とくに表記の書の場合、その内容の充分な理解と、そしてその上での取捨が、目下われわれにとり切実な急務と思われるからこそ焦燥に出ずるものです。主題はまさに書名の示すとおり。「人間科学」とは human sciences の訳語です。自然と「人文」（社会を含め）、この両分野の組み合わせは、もはや在来の「お座馴れ」流のそれではなく、格段に具体的なそれとして日程に上ぼる時期に達しているのです。これは生態学、行動学、進化生物学、集団遺伝学等、主として生物学・人類学の側での進歩によるものですが、そうした「人間科学」の学際講座がオクスフォード大学に新設されたとき（一九七〇年）、その機がすでに熟しきっていた状況を、右講座主任プリングル教授は、本書の序文中に述べています。この論集自体は別途同大学に七十年の歴史をも

つ「ハーバート・スペンサー記念講座」(右と同年度) からの所産で、六人の講師が論陣を連ねての盛観です。

第一講はハインド「攻撃」。演者はケンブリッジ大学の行動科学担当教授。その主著「行動生物学——ヒトの社会行動の基礎」上・下は、昨年訳書(講談社)が出ていて、うち一章はまさに同一主題に当てられています。ほかに大ロレンツの同名の著書「攻撃」が、これはみずず科学ライブラリーから訳出されています。さてハインドの論旨ですが、さつそくにも訳者・読者ともに難渋する三十ページ。攻撃(アグレッション)とは各種の動物で、同種個体間にいろいろな場面でみられる排除的行動をさすものですが、「殺し」にまで到る攻撃はヒトという動物だけの専売特許だというような知識は、すでに世上にも普及しています。演者は前段でまず動物界での攻撃の諸例につきその機構や意味を論じ、後半部でヒト社会(とくには一九七〇年当時のヤングたち)にみられる攻撃の問題に転じます。前半部では、後述のウィン・エドワーズ教授の所論への反駁なども主眼の一つで、なわばり行動としての攻撃での敗者側を例の「利他的行動」に含めることの行き過ぎを衝いたりし

ているあたりは、どうやら読みとれます。攻撃は動物界ではそれぞれ然るべき適応的価値をもつものに違いないとして、それがどのようにしてヒトにまで継承されているのか、ヒトではどのような個体的・社会的効果を演ずるのか、といったかんじんの点の論議が、言語障壁に阻まれ、読者に伝わってこないのが残念で、いっそ原書に就いてあらためて勉強をと一念発起する読者も出てきていいと思います。

第二講 グルベニック「人口増加の抑制」。演者は人口動態学専攻。パークシアの公務員養成大学教授。「人類を存続させたいならいまますぐにも人口増加率をゼロに引き下げることが必要」という生物学的に自明の前提から、この講義は始まり、以下終始これが実現に向けての諸般の現状データ、具体的問題点、解決策等を克明に検討します。産児数の切詰めに伴なう女性の社会的役割りの転換の問題なども、まともに取り上げているのが印象的です。

第三講 ウィン・エドワーズ「社会倫理の生態学と進化」。この演者が、第一講でハインド教授の槍玉に上がっ

た当人です。アバディーン大学の動物学教授。問題は前講同様動物やヒトの人口動態にかかわるもので、まず新旧両派のダーウィニストたちの見解の棚卸しから取りかかります。演者の自家の研究は、アバディーン近辺のヒース地帯のライチョウ個体群をモデルとするもので、これにはとくに一節を当てています。生物の進化的適応は人口の無限の増殖へ向かうものではなく、本来一定限界への自己調節能を内蔵するというのがその趣旨で、前記のなわばり制の「利他主義」などの言辞がとび出すのもそのかわりからです。これが終段ヒト社会の話に移ると、モーゼの十戒や社会倫理の進化的・遺伝的基盤の論議になります。例によって隔靴搔痒の行文が頻出しますが、比較的読みやすい一章です。

第四講 G・A・ミラー「生物学的過程としての言語による伝達」。ロックフェラー大学教授、大脳生理学者とみられるこの演者は、本講座の名称の主H・スペンサーがそのむかし言語の進化について「素朴な手まね足まねから近代科学まで」の足どりを要約したことへの回想から切り出し、末尾を再びその同じ要約で結ぶまでの三十ページを、

過去七十年間の関連諸分野における進歩の所産で充実させています。チンパンジーの記号言語能力についての知見なども、そうした重要な寄与の一つです。言語に特有の「単一目的」学習メカニズムを強調するチョムスキーの立ち場に対しては、慎重な態度を持っています。猿人段階の集団狩猟者たちに始まる音声交信、そしてそれが伝達する文化それ自体が、人類の脳と言語の急速な進化への淘汰圧の基盤となったという論旨が、例の言語障壁に阻まれつつも博識かつ慧眼に説かれています。

第五講 ダーリングトン「人種・階層・文化」。当時すでに古稀に近かった植物染色体学の大御所（オクスフォード大）の引っ提げて登壇したスペンサーも顔負けの大テーマです。石器時代から現代に及ぶ世界の人類文明史を、遺伝と進化の視点から縦横に論じています。聴衆を煙に巻く長口舌に似て、しかも随所に今後へのまともな実質的課題を提起しています。少なくともこの一講だけは、あらためて原書をテキストとしての自主ゼミなどに取上げるのうちがあります。

第六終講の真打ちはドブジャンスキー「人類進化の独自性」。六講師中最年長、この講演の五年後に七十五歳で他界したカリフォルニア大学遺伝学教授。生物学者ならこの演題をみただけで、その内容や解答のあらましに察しがつくでしょうが、ただしさすがにこれは当代第一級の模範答案案なのです。ヒトという動物の独自性につき「人間は別の動物種ではあるが、まったく別の動物だというわけにはいかない云々」というシンプソンのことばが引かれています。このかんじもなくだりで訳文の意味が通じません。察するにこの「まったく別の」の原文は、*just another species of animal* あたりで、つまり「ただ、いま一つ別種の動物」というだけのものではない」という意味なのです。また中盤の一節の見出しが「遺伝学を超越する文化の遺伝的基礎」とありますが、この見出しでは遺伝学を超越するのは文化の方なのか、その遺伝的基礎の方なのか、どっちにもとれてしまいます。正解はもちろん前者の方で、人間の文化もその基礎はやはり遺伝的なのだというのが、大事な論点なのです。人間個体の行動的基礎についての例の「白紙状態」説も出てきますが、こここの所はとくに人文・社会系出身の読者に注目してほしいくらいです。他にも大事な論

点はいろいろある中で、例の動物行動上の「利他主義」についての演者の一言だけは、ちょっと気になります。子に対する母動物の利他的行動を、倫理的な意味での「利他」主義と混同する人は、いかに単細胞の生物学者にもいないと思います。しかもヒトの親の愛にいまなお生物学的基礎の残存することは、正直のところ否定できません。だいいち倫理だけでどうしてあのような強固さを保持できるものでしょうか。

最後に訳者が「あとがき」で綴られた感想を読んでこちらもいろいろ感じましたが、すでに紙数も尽きました。ひと口でいえば、戦後わが学界の置かれてきた思いのほかな文化的隔離状態への重ねての反省ということになります。

(お茶の水女子大学・生物学)